

遅まきに山口台風に巻き込まれた一読者の備忘録断片

稲賀繁美

1

西暦一九九九年五月某日。常宿のオテル・ミシュレが満員で、山口昌男はバリ、オデオ
ン座近くの別の安宿、オテル・ドラヴィーニュに投宿。ロビーというには狭すぎるホテル
の応接間で、朝からロベール書店の辞書編集長にして、国際記号学会元副会長のアラン・
レイと面会。秋に国際日本文化研究センターで予定していた国際学会に、おふたりを招待
し、講演をお願いするための予備交渉。開口一番、ポクはレヴィ・ストロースの弟子では
なくて同僚だ、などと、お得意の自己紹介。ウンベルト・エーコ、トーマス・シービオッ
クなど、共通の友人の消息を巡って話に花が咲く。昼に地下鉄のオデオンの駅まで、秋
山祐徳太子ご一行と落ち合う。うっかりダブル・ブッキングしていたのを詫び、一同祐徳
太子氏の写真に収まり、午後の調査日程を再調整(本件については、秋山氏による証言が、『山
口昌男山脈』無用亭編一五三頁にある。請うご参照)。

タクシーでモンパルナスに出て、アラン行き付けの魚料理店(ドームの outlet)で、魚屋兼業)にて昼食。話題はもっぱらふたりがもらった勲章とその推薦制度の国際比較。「老後の愉悦」(桑原武夫)。その翌日午後だかには、ラスパイユの人間科学の家三階にて、ダニエル・ド・コッペの主催する研究会で発表。岡本太郎を一九三〇年代フランスの人類学のかに位置付ける話題。終えて夕食は、近所の安イタリア料理店。いたって健啖だが、食事の味など眼中になく、ひたすら会話が大好きで、その場を自分の話題で占領する山口氏。

その数日後の午後だったかには、ラスパイユの社会科学高等学院で、『コレクシオン』(吉田城・吉田典子訳、平凡社、一九九二年)、『ヨーロッパとは何か』(松村剛訳、平凡社、一九九三年)ほかの著者、クシシトフ・ポミアンと面会。マリノフスキー、ヴィトケヴィチ、ゴンブローヴィチ、ヤン・コットなどポーランド知識人の人脈に関して、縦横のおしゃべり。録音をしておかなかったのが惜しまれる高密度。前日午後、ノートルダム寺院の近くの古本屋で見つけたといって、ポミアン氏のポーランド語の旧著を取り出したのは、ポミアン氏もびっくり。もう母国でもめったに見つからない本だ、と懐かしがりながら、記念の署名。この会見も——実際には実現しなかったが——山口氏が当時会長を務めていた日本記号学会の総会に、『アートフル・サイエンス』(高山宏訳、産業図書、一九九七年)、『ボディー・クリティシズム』、『グッド・ルッキング』、『ヴィジュアル・アナロジー』他の著者で、視覚文化研究の旗手にして、元北米十八世紀学会会長の才媛、バーバラ・マライ

ア・スタフォードと並びクシシトフ・ポミアンを呼んで、「コレクシオンの記号学」を論じよう、との企画の打ち合わせを兼ねていた。そのあと山口氏は近くのカフェに入り、生ビールを片手に、小一時間、同日夕刻のふたつめの講演の準備。

山口昌男の行状に近くから接し、その精力に呆れたのも、これが最初なら、その外国語でのおしゃべりを耳にしたのも初めてだったが、そのフランス語、いやはや堂に入ったものでした。一回目の講演は、ド・コッペによる事前訂正の間に合った前半はともかく、前夜深夜に書き継いだという未修正原稿に突入するや、耳傾けても時折折意晦澁・発音不明豊富すぎる内容は、山口昌男未体験者には、とうてい消化不可能。ところがレイやポミアンとのぶっつけ本番の会話に同席していると、学識尋常ならぬ好敵手を相手に、あの伝説的な博覧強記は水を得た魚状態。相手の言うことは確実に聞き取って、当意即妙の受け答えを——文体はともかく——至極明快に紡いで、とどまるところを知らない。それで、二回目の講演の前に一言だけご注進申し上げた。山口センセ、テクストを読むより、即興でのおしゃべりのほうが、ずっと分かりやすいし、聴いてておもしろいですよ、と。するとセンセは本番でも、イナガに言われたので、と言わずもがなの断りを入れて、やおら原稿なしのおしゃべりに打って出た。

それがまあ、なんともよどみない、見事なストーリー・テラー振り。日本語の山口節が、ほとんどそのままの調子でフランス語(として理解可能な普遍?言語)に自動翻訳されてゆ

く、その迫力。傍聴していて、つくづくこの人は口から先に生まれてきたのかしら、と感心する。おしゃべりせんとかや、生まれけん、という本領発揮ぶりには、飛び入り聴講のボミアン氏も感心することしきり。世界に通用する、とはこういうことを言う。まさかヤマグチのフランス語では、コレージュ・ド・フランスでの講演は無理だろう、などと冷やかに向きもあるが、どうだろう。全く準備不足のカルロ・ギンズブルグ(その仕事を日本にいち早く紹介したのも、『知の旅への誘い』(一九八一年)の山口昌男だった)が、本人はうまいつもりでフランス語で駄弁を弄し、不評を買ったり、『世紀末ウィーン』(安井琢磨訳、岩波書店、一九八三年)のカール・E・シヨースキーが、第一回目だけ、ピエール・ブルデューに直してもらったらしい、単純過去だからの珍妙なフランス語で挨拶をしたのを見たこともある。なにも皆が高階秀爾や二宮宏之、まして渡邊守章のようなフランス語を操らなくても、構うまい。書いたテキストは発音できるが、会話はからっきし、という日本インテリが多いなか、読むよりしゃべるほうがお得意とは、いかにも日本人離れしていて、文化の道化の名にも相応しい。

2

二十世紀後半の日本の知的世界の歴史を書くならば、山口昌男の読者論というジャンルが必要不可欠となるだろう。一九七五年に大学に入学するまで、知的鎖国状態で、「世の中途」まで隠されていたこと(木下直之にもまったく無知だった田舎者の当方など、あまりに遅れて来た読者だった)。

その頃までに、初期山口は、すでに『道化の民俗学』(『文学』連載は一九六〇年代末、『アフリカの神話的世界』(一九七一年)、旧編『人類学的思考』(一九七一年)、『本の神話学』(一九七一年)、『歴史・祝祭・神話』(一九七四年)などの画期的な仕事を世に問い、『文化と両義性』(一九七五年)で「知」の覚醒と冒険に確かな衝撃を与えていた。中公文庫で『本の神話学』(一九七七年)や『歴史・祝祭・神話』(一九七八年)が出て初めて著者の存在に気づき、一読驚喜したというのでは、あまりに奥手と罵られても返す言葉すらないが、旧編『人類学的思考』なども、図書館でふと見つけて読み始めるや、その異様な知的熱気に当てられて一晩で通読してしまったことも、懐かしい。そのころから毎月のように『現代思想』(『思想』『海』)ほかに登場した、世界の知的戦士との対談は、『二十世紀の知的冒険』(一九八〇年)にまとめられる頃までには、その内容を貪るようにして暗記していた。それより以前 *Esprit* 誌の日本特集号(一九七三年)を、阿部良雄の知識人論とともに飾った長大な「日本王権論」(Structure mythico-théâtrale de la royauté japonaise)は、その後、まだに日本語全訳はされていないが、これも遅まきながら見つけ、夢中で一気に読了した。その衝撃的な書き出しの一節など、いまだにフランス語で暗唱できる。

そして、そんなころ、駒場のゼミに出席して知遇を得た由良君美から、ローレンス・ヴ

アン・デル・ポストを橋渡しとする著者との交流を聴かせてもらう機会も得た。果たして山口氏が由良氏の書棚からポストの数冊をもぎ取るように持ち帰ったのか、それとも由良氏が山口氏の架蔵本を持ち去ったのか、書狼同士の証言は見事なまでに食い違う。とまれ『影の現象学』の河合隼雄を含め、異分野の目利きたちが、同時多発的に『戦場のメリークリスマス』の原作者に注目し始めていた。

山口のポストへの注視は初期の「失われた世界の復権」(一九六九年)に溯るが、そのフリークス論を「ヴァルネラビリティについて」(一九八〇年)として含む、本書『文化の詩学』I・II二冊(一九八三年)からは、「知の総合商社」といわれた中期山口昌男の縦横無尽の執筆ぶりが、情熱とともに伝わってくる。それはまた、最初は毛嫌いしていたはずの岩波文化人へと自ら移行しながら、ミイラ取りがミイラになるどころか、かえって岩波書店そのものを「ヘルメス」化させるに至る仕掛け人の悪戯(「へるめす」創刊は一九八四年で、同年山口は日本民族学会会長に就任している)、その結果発生した地殻変動の現場報告ともなっている。それは、一九六〇年代の熱狂に比べれば、一種エア・ポケットのような脱力感^{しき}は否めなかったにせよ、まだ多士済々が混沌として鎔を削っていた七〇年代の知的活況が、叢書「文化の現在」によって整序され、良かれ悪しかれエスタブリッシュメントへと制度化されていった一九八〇年前後数年の知的雰囲気^{しき}の証言でもあれば、さらには、華々しく発足した記号学会(一九八一年)が、「詩学」を合言葉に脱領域の知的遊戯を繰り広げる

どころか、「寄り合い所帯」(鶴見俊輔)による知の活性化という本来の目論見にも失敗し、言語学、文明論、分析哲学といった専門分野の主導権争いによる内部分裂に足を取られ、やがて後発の「カルスタ」やジェンダー・スタディーズにお株を奪われることになる(記号学会編『記号学の逆襲』二〇〇二年)、という時代の風向きの転換点にも重なっていた。

『文化の詩学』は、刊行されるや、いままでその助走を支えてきたはずの地盤「滑走路をふいに失って、中空に舞い、そこに託されていた豊饒さも、もはや着地点を見失った迷子と化して、孤独な光芒を放つほかなかった——少なくともそれが、当時欧州に脱出した若者が、遠隔地から抱いた感触だった。

同じころ、欧州でも言語学ブームや記号学全盛期には急速に翳りが射し、詩学という言葉も、光冠を地に落とした墮天使よろしく低迷し、人々の興味は、管理主義的発想の人工知能技術や情報工学、東欧の激動と冷戦終結につづく民族紛争、移民・難民問題へと移っていった。そうしたなか、山口昌男は、自らの「敗北」を合理化するためか、伏流水から突如噴出して主流派を混乱に巻き込むトリックスターとしての出自への忠実さを立証するためか、「おちこぼれ」たる自らの知的小先祖様の探訪へと旅立ち、日本近代の精神の考古学、あるいは言うところの周縁性の歴史人類学へと深入りを始め、『挫折』の昭和史(一九九五年)、『敗者』の精神史(一九九五年)を矢継ぎ早に世に問うと、三部作最後の『内田魯庵山脈』(二〇〇一年)に集約される第三期を、新世紀の劈頭には見事完遂した。

その今になって『文化の詩学』を読み返す意義とは何だろうか。一言でいってここには、知的渴望感に苛まれ、情報飢餓状態に喘いだ敗戦後第一世代の底無しの食欲さ、己が心身を百科事典と化さねばやまぬ貪婪さの、最良の歴史史料が生きたままで保存されている。もはや昨今の電子情報データ・ベース活用の文献処理からは期待できない、縦横にして時に野放図なまでの、山口流越境と山口式練金術の——継承不可能な個人芸の——作業現場がここにある。つづく世代の高山宏による情報爆発を経て、一時は狂躁状態を験したものの、ほどなく息切れして元の古巣に逃げ込み、知的飽食のためか、かえって怠惰になった今日の日本語の文化状況。それを再活性する元気の源が、これだけ手付かずで集約された書物は、他にない。各ページに脚注をつけ、クロス・レフェランスを巻末に自ら描いてみよ。『踊る大地球』(一九九九年)と踊りきった知の異端児の闊達さを、読者もまた自らの糧とできることだろう。

「山口昌男の愛すべき迷惑」(小松和彦)から、突如ご指名戴いた門外漢解説者の、これが未来の読者への期待である。

(国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学助教授)

本書は一九八三年七月、岩波現代選書の一冊として岩波書店より刊行された。現代選書版の第一章「政治の象徴人類学へ向けて」は『天皇制の文化人類学』(岩波現代文庫・学術3、二〇〇〇年)に第七章として収録されており、本文庫版では割愛した。

文化の詩学 II

2002年10月16日 第1刷発行

著者 やまぐちまさお
山口昌男

発行者 大塚信一

発行所 株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

電話 案内 03-5210-4000 販売部 03-5210-4111
現代文庫編集部 03-5210-4136
<http://www.iwanami.co.jp/>

印刷・精興社 製本・中永製本

© Masao Yamaguchi 2002
ISBN 4-00-600088-X Printed in Japan